

91 生れ出ぬ事こそ親の思ひなれ 以徳  
 92 霜夜をへてや侘る老鶴 城与  
 名の裏

93 絶やらぬ声もはげしき松の風 城作

94 さびしさのみに送る柴の戸 芳

95 それとする人も有しを誰問ん 受記

96 つゝむも袖の泪くるしも 以徳

97 夕べ夕べ玉とうかれて飛螢 蓮也

98 池の汀の露ぞ乱るゝ 聴与

99 さそはれてよる藻千々よふ秋の波 城与

100 初しほあひの船の数々 執筆

芳春院様 御十六句 受記十四 以徳十四 蓮也十三 城与十三 聴与

十三 城作十二 城旦四 宗以一 執筆一

【付記】 本稿をなすにあたり、貴重な資料を閲覧させていただきました金沢市立玉川図書館に厚く御礼申し上げます。

- 48 夕つげ鳥や朝け寝ふかき 受記
- 49 関の戸を越しも花に顧て 以徳
- 50 うち霞たる須磨の浦浪 芳
- 三の表
- 51 けふよりや春の迎ふる淡路島 蓮也
- 52 静になりて明る日の色 聴与
- 53 空寒み雪をもげなる蘭の竹 芳
- 54 時雨時雨て夜は明ぬめり 城与
- 55 互にも泪ながらのきぬぎぬに 受記
- 56 月をよすがの忘れじの中 以徳
- 57 身にしめて思ふ契のいかならん 城作
- 58 うちとけ初し露の言の葉 芳
- 59 旅は只知るしらぬ袖の相やどり 聴与
- 60 一木の陰に凌ぐ夏の日 蓮也
- 61 松たてるかたをかけたる氷室山 城与
- 62 すめばすむかの谷の笹ぶき 受記
- 63 捨る世やあるにまかする身の行衛 以徳
- 64 まじはる中も疎く成ぬる 城作
- 三の裏
- 65 たびたびにのぼれる司位にて 芳
- 66 御前近くも宮づかふ人 聴与
- 67 おとしめてにくむや忍びあへざらん 受記
- 68 なをざりならぬ泪わびしも 城与
- 69 特更に夜半さへあるに起急ぎ 蓮也
- 70 月にしやどる道野べの霜 芳
- 71 とめよるも玉野の虫の音を絶て 以徳
- 72 かれ残りたる薄むらむら 城作
- 73 水さびあてさびし田中の畔伝ひ 城与
- 74 かつは堤のかたへくづる、 蓮也
- 75 くれ竹の折れつ、靡く陰浅み 芳
- 76 ませにあまれる花のくれなる 受記
- 77 さし移る外面の日かり暖に 聴与
- 78 蝶のつばさぞ寝ぬるまゝなる 以聴
- 名の表
- 79 風は只吹たゆみたる野べの末 城作
- 80 草のまくらやしはし結ばん 芳
- 81 九重の空は夢にも見まくほし 受記
- 82 山より山の奥に住ぬる 聴与
- 83 ちれば咲花に夏まで馴々て 城与
- 84 鳴や小鳥のいろいろの声 以徳
- 85 朝霧のそのまゝかこふ野を近み 蓮也
- 86 月も夜をまつ影幽か也 城作
- 87 かならずと契り置しを頼にて 芳
- 88 人ゆへおしき命とぞなる 受記
- 89 忍ぶるもあはぬ心の程はうし 聴与
- 90 占にまかするえにしあやなや 蓮也

- 5 吹まゝにあらしの音の寒かへり 城旦
- 6 しづくも氷る山陰の道 聴与
- 7 ゆく水も同じ苔路の浅みどり 蓮也
- 8 岩ほ続きの流れ遙けし 城作
- 裏
- 9 作りをく田面は爰にかしこにて 宗以
- 10 賤か家居の賑はへるとき 芳
- 11 つどひ来る袖や所の神祭 受記
- 12 末は春日の山ぞ間ぢかき 以徳
- 13 小男鹿の明ほの深く帰る野に 城与
- 14 月にこぼるゝ草々の露 城旦
- 15 雨過るかたよりすずぶ秋の風 聴与
- 16 雲のとだへに暮る稲妻 蓮也
- 17 端居する袖ひやゝかに成ぬらし 城作
- 18 真木の戸ぼその奥に入ゆく 受記
- 19 咲初し籬の花の薫り来て 芳
- 20 あかぬ詠は藤のたそがれ 城与
- 21 待るゝや弥生の空の郭公 以徳
- 22 出こそやらね淀の川舟 聴与
- 二の表
- 23 宇治山や雪に柴取道絶て 城与
- 24 里はむかひに煙ほのめく 城作
- 25 松原は野辺を見こしに明渡り 蓮也
- 26 鐘のひゞきを送る小夜風 芳
- 27 秋寒き枕の月に夢覚て 受記
- 28 都を忍ぶ酒の露けさ 以徳
- 29 一筆のたよりともなき天つ雁 城与
- 30 あはれ夕べの詠めかなしも 城旦
- 31 又よとて別れし今朝のしのゝめに 芳
- 32 思ひ消なばいかに玉の緒 蓮也
- 33 左遷もゆるす限りを頼め来て 聴与
- 34 めぐみも深くすみよしの神 芳
- 35 そのかみを仰ぐにあやしやまと歌 以徳
- 36 心を種ぞ人のよしあし 受記
- 二の裏
- 37 聞得るはひらく御法の花はちす 蓮也
- 38 見るにも寺の住居涼しき 聴与
- 39 山遠くみなぎり落る瀧つ川 城作
- 40 波より波の岩たゝく音 城与
- 41 松は只のべふすまゝの枝朽て 受記
- 42 人も通はぬ霜のふる道 以徳
- 43 きりぎりす秋の名残や侘ぬらん 芳
- 44 冷じくしも暮る野の末 城作
- 45 山端の月はあらしに影澄て 聴与
- 46 跡さりげなきむら雨の春 蓮也
- 47 鳴捨る後はほ(虫損)き過ぬ也 城与

待っている夜が来るまでは月の光もかすかだが、夜がやってくれば月が輝くように、自分もあの人が約束通り来てくれれば意気消沈してはいないのに、と秋の景色を詠んだ句に対して恋の句を付けた。常套的な表現ではあるが、うまく転じていると思われる。

93 絶やらぬ声もはげしき松の風 城作

94 さびしさのみに送る柴の戸 芳

訳・〈前句〉絶えることがない声も激しい松の風。〈付句〉粗末な家で、寂しさの中で日々を送っている。

寂蓮の「柴の戸をとほであるや誰ならん通ひなれたる峰の松風」〔夫木集〕のように、「柴の戸」と「松風」がとりあわされることがあるので、ここでも「松風」から「柴の戸」を連想して付けたと思われる。『源氏物語』の「松風巻」の明石の上の境遇まで連想したかもしれない。そこまで考えずとも、伝統的な古典の知識があったことがうかがわれる句である。

以上、芳春院が詠じた十六句についてみてきた。わずか十六句で、芳春院の作風について論じることはできないが、伝統的な世界から逸脱せず、それなりに変化を持たして付けることもしており、印象としては、それなりに古典を学習し、連歌に関しては、かなりの連歌上手であった

と思われる。これほどの連歌を詠むことができるということは、それなりに連歌会などに一座していた経験があると思われる。管見に入る、確実なところの連歌資料はこの一巻だけであるが、他にも残っていない不思議ではない。あらたなる発見が期待される場所である。

(注) 田中隆裕「初期加賀藩主の学芸をめぐる」〔白山万句資料と研究〕昭和六〇年)

#### 【翻刻】

表記は、現行の漢字等にあため、二字分の踊り字は開いた。洋数字は便宜上付けた通し番号である。

慶長二十年正月廿日の御会

芳春院様御興行御連歌 百韻

賦何人

表

- |   |               |     |
|---|---------------|-----|
| 1 | 物毎にあらたまる日を老の春 | 芳春院 |
| 2 | 幾年々の宿の鶯       | 受記  |
| 3 | 庭広くうつつ若木の梅咲て  | 以德  |
| 4 | 雪に霞まぬ釣簾の外の月   | 城与  |

65 たびたびにのぼれる司位にて 芳

訳・〈前句〉交際する二人の仲も疎遠になる。〈付句〉一方がたびたび昇進していくので。

疎遠になっていった理由を付けた。世間によくあることだと思われるが、具体的には立身出世していった秀吉のことを念頭においていたとするのは、深読みしすぎであろうか。

69 特更に夜半さへあるに起急ぎ 蓮也

70 月にしやどる道野べの霜 芳

訳・〈前句〉ことさらに夜中であるのに急いで起きて。〈付句〉道のべの霜に月がまだ宿っている時に。

「夜半」から「月」を付け、夜の様子を、霜が降りた寒いものとした。夜中である上に、寒いのもかわからず、早く起きて出立しなければならぬ、過酷な状況とした。

75 かつは堤のかたへくづる、 蓮也

76 くれ竹の折れつ、靡く陰浅み 芳

訳・〈前句〉一方では堤の片側が崩れている。〈付句〉背の低い呉竹が、

折れながらも風に靡いているが、その水に映った陰は浅い。

堤に生えていた呉竹が、堤が崩れたことよって折れながらも風に靡いている状況を付けた。もともと背が低いためにその水にうつる陰は浅いことではないが、折れてさらに陰が浅くなっているのである。伝統的な詠みぶりではないように思われる。

79 風は只吹たゆみたる野べの末 城作

80 草のまくらやしばし結ばん 芳

訳・〈前句〉風は野辺の末では勢いが弱まっている。〈付句〉草枕をここでしばらくむすぶことにしよう。

野辺の末で風が弱くなっている状況を、旅の途中で休むのによいものとして付けた。打越の句が「蝶のつばさぞ寝るまゝなる」であったので、直接「寝る」とか「眠る」とは無いが、変化を楽しむためには、「草の枕」をここで出すべきではなかったと思われる。

86 月も夜をまつ影幽か也 城作

87 かならずと契り置しを頼にて 芳

訳・〈前句〉月も夜を待ってか、その光はかすかである。〈付句〉必ず来ると約束していったことを頼みにして。

訳・〈前句〉人も通らない霜がおりた古い道。〈付句〉きりぎりすが秋の名残をつらく思っているだろう。

『連珠合璧集』に「霜トアラバ」「虫の声枯るる」とあるように、「霜」から「秋の虫」を連想して「きりぎりす」（蟋蟀）を付けた。また「霜」は「野も山も霜置きかへて行く秋の名残に残る袖の白露」（文保百首）のように行く秋が変えたものである。付句では、秋の名残が具体的には何か不明であるが、この和歌に引かれて詠まれたものかもしれない。

49 関の戸を越しも花に顧て 以徳

50 うち霞たる須磨の浦浪 芳

訳・〈前句〉関所を越えても都の花を振り返ってみてしまふ。〈付句〉霞んでいる須磨の浦波のもと。

関所を越えて西国に下る人の景として付けた。また花から霞を付けた。三条西実隆の「さへかへり関吹きこゆる風の音霞もはてぬ須磨の浦波」（『雪玉集』）は、この句と同じく、関、霞、須磨の浦波を詠み込んだものである。この和歌をふまえたかもしれない。また須磨の浦波は『源氏物語』（須磨巻）で、筑紫の五節との贈答和歌にも見られる。芳春院には、『源氏物語』のことが念頭にあったかもしれない。

52 静になりて明る日の色

聴与

53 空寒み雪をもげなる藪の竹 芳

訳・〈前句〉静かになって夜が明けて、あかるくなった日の色。〈付句〉空は寒々しく、庭の藪の竹には重げに雪が積もっている。

静かに夜が明けた状況を、雪が降った朝の情景として付けた。雪と竹のとりあわせは、白と緑のコントラストとして伝統的和歌にもしばしば詠まれる。ここでもそうした伝統に則ったものと思われるが、北国の雪の降った、静かな朝を迎えた経験のある者にとっては、実体験をふまえたものと思いたいところである。なお芳春院の句に「時雨時雨れて夜は明ぬめり」と付けられているが、これは打越といわゆる観音開きとなっており、「明る日」に差し障っているのではないかと思われる。

57 身にしめて思ふ契のいかならん 城作

58 うちとけ初し露の言の葉 芳

訳・〈前句〉痛切に感じるほど思う二人の縁はどのようなものなのだろうか。〈付句〉打ち解けはじめたおりの露のようにはかない言葉をさくと思ふ人との縁がどのようなものであるか、を考える状況を付けた。恋の句としては、伝統的な内容で、特にめあたらしいものはない。

64 まじはる中も疎く成ぬる

城作

扉の奥に入っていく理由を付けた。つまり垣根の花が薫って来たので、それに誘われて奥に入ったことになる。伝統的には、まがきの花は色について詠まれるので、薫りを詠んだのは珍しい。奥に入った理由を付けたために薫りとせざるをえなかったと思われる。芳春院の句に「あかぬ詠めは藤のたそがれ」と付けているのは、『源氏物語』の「奥山の松のとほそをまれにあげてまだ見ぬ花の顔を見るかな」（若紫巻）とあることを意識したものとも考えられようか。とすれば芳春院の句そのものに『源氏物語』を想起させるものがあつたことになる。

25 松原は野辺を見こしに明渡り 蓮也

26 鐘のひびきを送る小夜風 芳

訳・〈前句〉野辺を隔てて見える松原は一面が明るくなっている。〈付句〉あかつきに打たれる鐘の響きを夜風が送ってくる。

野辺の向こうの松原は明るくなっている状況に対して、こちら側はまだ暗い状況を、聴覚的に、夜風を送る鐘の響きで示した。

30 あはれ夕べの詠めかなしも 城旦

31 又よとて別れし今朝のしの、めに 芳

訳・〈前句〉ああ、夕方、物思いにふけてぼんやりながめていること

が悲しいことだ。〈付句〉また今夜といった今朝の明け方。

夕方になって恋人のことを思って、物思いにふけている状況が、なぜ悲しいのかを付けた。つまり、今朝別れた時に「又よ」といつて期待させておいてまだ来ないために、一層悲しく感じられるのである。「またよとて別れし夜半の月のみやむなしき空にめぐりあふらん 太宰帥親王」〔南朝五百番歌合〕をふまえて詠まれたか。

33 左遷もゆるす限りを頼め来て 聴与

34 めぐみも深くすみよしの神 芳

訳・〈前句〉放浪する身も許してくれることだけを頼りにさせて来て。〈付句〉恵みも深い住吉の神。

「左遷（さすらへ）」の身に対して、定住をひびかせて「住みよし」、そして「ゆるす」「頼め来て」に住吉の神を付けた。「頼む」は「被保護者の立場から力強い保障を期待する気持ちを表す」（小学館『古語大辞典』）。光源氏が須磨に下ったが、住吉の神によって都に戻ることができ、そのお礼参りをしたことをふまえていると思われる。

42 人も通はぬ霜のふる道 以徳

43 きりぎりす秋の名残や侘ぬらん 芳

く実感もこもっていないようが、この発句は、次の和歌をふまえたものと思われる。

百千鳥さへずる春は物ごとにあたまれども我ぞ古りゆく

〔古今集〕・春上二八・よみびとしらず

古来有名な和歌であったらしく、「物ごとにあたまれども驚のさへずる春は身のみふりつつ」(『為家集』)など、この和歌をふまえたものは少なくない。芳春院の和歌の教養がうかがわれる。さらに述べるならば、「百千鳥」は古今伝授の秘説「三鳥」の一つであり、右の『古今集』の和歌は、『源氏物語』の古注で、「末摘花」「御法」「横柱」の各巻で引用されている。田中隆裕氏は「和歌に親しむことは勿論、地下歌学流ではあるが古今伝授や源氏物語相伝を受けていたことに注目したい」と述べられたが、芳春院が伝授を受けていたことを句作の背景に見ることができてもかもしれない。

なお芳春院は発句を詠み、百韻の中で、重きをなす人が詠み込むとされる「月」と「花」を詠んでいる。他の連衆の素性について不明のため、百韻の中で芳春院の身分関係も不明であるが、最も重く扱われる存在であったことは疑いない。

9 つくりをく田面は爰にかしこにて 宗以

10 賤が家居の賑はへるとき

芳

訳・〈前句〉作りおいた田はここかしこにある。〈付句〉身分の賤しい者の家にも豊かになる時が来た。

「賤(しづ)」は身分の低い者。「田に立つ賤の心地して」(『狭衣物語』)、「小山田に水引き侘ぶる賤の男が心や晴るる五月雨の空」(『新後拾遺集』・夏・二一一)とあるように、「賤」は田をたがやすことから、前句の「つくりをく田面」に「賤」を付けたと考えられる。連歌寄合書『竹馬集』では「苗代」の項に、「賤の男が苗代垣をあげ置て今そたな井に種をかすなる」の歌例はあげられているが、付合としてはなく、『連珠合壁集』の「田」「春の田」「夏の田」「秋の田」「冬の田」の項目をみても「賤」はない。また『日本書紀』(崇神七年十一月)に「五穀(いつつのたなつもの)既になりて百姓(おほみたから)にぎはひぬ」とある。「爰にかしこにて」とあることから、少なからずの収穫があるとみて「賑はへる」と付けたと思われる。こうした光景は実際に見聞していたであろう。

18 真木の戸ほその奥に入ゆく 受記

19 咲初し籬の花の薫り来て 芳

訳・〈前句〉真木製の扉の奥に入ってゆく。〈付句〉咲きはじめてまがきの花が薫って来るので。

「真木」は檜や杉などで、建築材としてすぐれたものをいう。真木で作られた扉のあるということは、それなりの身分のある家であろう。その



## 芳春院の連歌

## A Study on the Renga by Hoshunin

陶 智子

SUE Tomoko

前田利家の室である芳春院が文雅に熱心であったことは、つと言われているが、これまで連歌についての言及はあまりされていないようである(注)。現在連歌作品の目録として最も詳しい『連歌総目録』(明治書院)にも、芳春院が一座した連歌と認定できるものがなく、加賀の白山神社に奉納された、いわゆる「白山万句」のうちの一卷の発句が芳春院のものかとされる程度で、その連歌作品が知られていないことによるものと思われる。

しかし、金沢市立玉川図書館に所蔵される、天保十二年(一八四二)の奥書を持つ『連歌問答記』(目録番号0968・122)には以下のように記されている。

芳春院様には御連歌殊に勝れさせ給ひ、たびたび御会もあらせ候よしにて、今に御懐紙写しも伝へ侍りていと尊し。

そして慶長二十年(一六一五)の正月に芳春院の興行した百韻一卷を載せている。芳春院六十九歳のときのことであり、人質から解放されて、加賀に戻って迎えた初めての正月のこととなる。前年に利長を失い、この翌年には豊臣氏が滅びている。

この百韻で芳春院は十六句を詠んでおり、この句数は一座した連衆の中で最も多い。この多さは、当時の連歌に一座した身分の高い人の場合によく見られる、本人ではなく、連歌上手の代作であったという可能性がほとんどないことを示していると思われる。特に芳春院のものであることを否定する資料でも出現せぬ限り、本人の詠んだものと考えておきたい。とすると、これらの句は、芳春院の文雅に関する造詣の深さを知る上で看過できぬものと考えられるので、以下、その詠句について順番にみていきたいと思う。

1 物毎にあらたまる日を老の春 芳春院

訳・すべてのものがあらたになる正月の日であるが、自分は年老いて迎えることだなあ。

当時は「数え」で年齢が増すので、新年を迎えると歳をとることになる。先にも記したように芳春院はこの年六十九歳となっている。おそら